明日への道標

命の糧を生みだす
―黒澤酉蔵　雪印の原点―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

栃木の足尾銅山で日本初の公害問題といわれる鉱毒汚染が発生した。渡良瀬川流域の肥沃な農地は不毛地帯と化し、公害病による乳幼児の死亡などが相次いだ。みずからも貧しい農民の子である黒澤酉蔵（1885－1982）は命がけで被害者の農民たちを守ろうとする田中正造の生きざまに心酔し、17歳で農民救済運動に参加する。

理想の農業をめざして北海道に渡り、悪戦苦闘しながら酪農家としての道を切り拓いていった。経営危機に陥ると同業者を募って協同組合を組織し、のちの雪印乳業、現在の雪印メグミルクの礎を築いていく。独自に開発・製造・販売した乳製品は屈指の地方ブランドとして全国に浸透する。

商標となる雪印のマークには田中の遺志を受け継ごうとする一途な思いが込められていた。

一生を決めた決死の直訴

黒澤は現在の茨城県常陸太田市で小作農の家に生まれた。父は大酒飲みで借金を重ね、働き者の母が家計を支え長男の黒澤ら４人の子供を養った。

尋常小学校卒業後、漢学塾で学び、さらに向学心に燃えて東京行きを両親に願い出る。父は反対したものの、母に送り出され、14歳で上京した。東京数学院の給仕生を経て同校教師の書生となり、神田の正則英語学校に通った。

1901年12月10日、足尾鉱毒事件に一向に対処しない明治政府に失望して衆議院議員を辞職した田中正造が帝国議会の開会式から帰る途中の明治天皇に直訴しようとした。農民の悲惨な窮状を訴えた直訴状の草稿は万朝報（よろずちょうほう）の記者で社会主義者の幸徳秋水が執筆した。田中は黒の羽織・袴の正装で直訴状を高く掲げ、「お願いがございます！」と叫びながら明治天皇の馬車に駆け寄った。警護の騎兵が体勢を崩して落馬し、田中も転倒して警官隊に取り押さえられた。

黒澤酉蔵

直訴は失敗したものの。事件の深刻さは全国に知れわたった。黒澤も翌日の新聞で田中の決死の行動を知り、かつてない衝撃を受ける。

明治天皇への直訴は不敬罪として死刑に値する重罪だった。だが足尾鉱毒事件の波及を恐れる明治政府は異常者の乱行として田中を釈放する。

後日、田中が定宿にしている新橋の旅館を訪れて黒澤は驚いた。余りにもみすぼらしく、とても国会議員が泊まるような場所とは思えなかった。

突然の来訪にもかかわらず田中は快く迎えてくれた。穏やかな表情で問題の本質を丁寧に理路整然と語る田中の姿に深く感動する。話が済む頃には田中を生涯の師として農民救済運動に立ち上がる決心を固めていた。のちに黒澤は日本経済新聞に連載された『私の履歴書』で「青春時代に、ひとつの偉大な人格に出会って、私の一生が決まってしまった」と述懐している。

経営危機に新製品を開発

活動の第一歩としてキリスト教徒の内村鑑三が率いる足尾銅山鉱毒災害地学生視察団に加わった。当時の内村は万朝報の記者で「鉱毒地巡遊記」を連載していた。黒澤は学業を放り出して現地に足を運び、周囲から小田中と呼ばれるようになる。

警察からは要注意人物として監視された。和解派の農民を説得しようと家に上がり込んだところ、家宅侵入罪で逮捕された。前橋監獄での勾留生活は約６カ月に及び、活動仲間の婦人矯風会の幹部から差し入れられた聖書などを熟読した。これをきっかけに黒澤は後年、洗礼を受けることになる。

裁判では田中が有能な弁護士をつけて無罪を勝ちとった。黒澤の将来を心配した田中の説得で学籍のあった京北中学に復学する。学費は田中に請われて支援者の篤志家が支払った。

卒業後、最愛の母が急死し、幼い妹や弟を養う責任が課せられた。20歳になった黒澤は北海道に移住し、農民として生きることを決意する。

渡航して知人の北海タイムス社長に仕事先を相談すると札幌で酪農を営む宇都宮仙太郎を紹介してくれた。若くして渡米し、ウィスコンシン州立大学で近代的な農業を学んだ宇都宮は酪農家の草分け的存在だった。彼の牧場で酪農家としての修業を積み、歩兵連隊での兵役終了後に独立する。

最初は乳牛１頭でスタートし、午前３時に起きて搾乳、５時に牛乳配達、帰宅してまた牛の世話をするという孤軍奮闘の日々がつづいた。精魂を傾けた結果、５年後には乳牛が10頭を超えていた。生活が安定し、結婚して子供も生まれる。

1923年、関東大震災が襲来し、救援物資としてアメリカから牛乳を濃縮した練乳の缶詰が大量に届けられた。乳製品の関税が免除され、輸入品が続々と出回ると道内の練乳会社による国産牛乳の買い叩きや受け入れ制限が頻発した。

未曾有の危機に際し、黒澤は苦境に陥った道内の酪農家による協同組合の創設をめざす。1925年、念願の有限責任北海道製酪販売組合を設立。会長に宇都宮、専務理事に黒澤が就任し、新たにバターの製造・販売を開始する。翌年、北海道製酪販売組合連合会（酪連）に発展的に改組し、雪印の商標でアイスクリーム、チーズ、マーガリンなどを商品化していった。

天と地と人による合作

酪農家の教育の必要性を痛感していた黒澤は1933年、新たに北海道酪農義塾を創設する。塾長となって「農民は誠そのものであれ」などの農民道を力説した。これが後年の学校法人酪農学園の設立につながっていく。

1935年、初代会長の宇都宮が急病で辞任すると黒澤が会長に就任した。農業の振興や農民の社会的地位の向上へ政治活動も平行して進めていく。北海道会議員、札幌市会議員などを歴任後、戦時中の1942年に大政翼賛会の推薦で衆議院選挙に出馬して当選し、農林委員を務めた。

しかし敗戦後はGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領政策によって公職追放の身となり、会社役員の辞任も余儀なくされた。1950年に創業した雪印乳業株式会社では相談役に就任する。

公職追放解除後、1954年に北海道開発庁の諮問機関である北海道開発審議会の会長に選任された。８期16年にわたって指導的役割を果たす。

晩年は1913年に他界した田中正造の著作集の刊行に情熱を注いだ。岩波書店に働きかけて全集の刊行が決定すると編纂会の顧問となり、田中に託されて大切に保管していた日記や手紙を提供した。全集は1977年に第1回配本が開始され、1980年に全20巻が黒澤の存命中に完結した。その２年後に96歳で波瀾に充ちた生涯の幕を下ろす。

生前、黒澤が唱えていた健土健民の思想は田中から受け継いだものと誇らしげに語っていた。健やかな土地に健やかな民ありという健土健民を核心とする農業は「天・地・人の合作によって人間の生命の糧を生み出す聖業である」と述べていた。

雪印のマークは雪の結晶と北極星を組みあわせて誕生した。北極星は地球の自転軸の北極の真上に位置し、常に天空の一点で輝いて見える。古来から真北の方角の目印として船乗りたちの航海に欠かせないものだった。黒澤は北極星を田中と重ねあわせていたのかもしれない。